

禅宗寺院と庭園

はじめに 文化遺産部遺跡整備研究室では、庭園に関する調査研究をおこなっており、平成23年度からの第3期中期計画においては、中世庭園の研究に取り組んでいる。中期計画の1年目にあたる平成23年度は「鎌倉時代の庭園」を、2年目の平成24年度は「禅宗寺院と庭園」をテーマとし研究を進めた。

禅宗と庭園の関係については、これまでも龍居松之助(1884~1961)や外山英策(1888~1953)、重森三玲(1896~1975)といった庭園史の研究者による研究があり、庭園史以外の分野でも仏教学者の鈴木大拙(1870~1966)が、禅宗が庭園を含む芸術に与えた影響について言及している。また、2013年4月現在、特別名勝あるいは名勝に指定されている寺院関係の庭園約100件のうちの49件が禅宗寺院に関係する庭園である。その中には他宗派の寺院から禅宗寺院に改められた等、禅宗との関係が明確でない庭園が数件あるものの、それらを除いても禅宗寺院系が半数近くを占める(うち約9割が臨済宗系)。禅宗寺院系の次に多い天台宗系と真言宗系がそれぞれ18件、15件であることを考えると、その突出ぶりは顕著であり、禅宗寺院の庭園が日本の庭園史の中で一定の位置を占めていることは間違いない。

禅宗と庭園に関するこれまでの研究は、その対象が大きく2つのまともに分かれる。1つは夢窓疎石と庭園の関係であり、もう1つは禅宗と庭園、山水画と庭園の関係である。鎌倉時代末期から室町時代初期(南北朝時代)にかけて活躍した臨済宗の禅僧夢窓疎石(1275~1351)は伊勢国に生まれ、幼少期を甲斐国で過ごしたという。天龍寺等の開山で、瑞泉寺、天龍寺の庭園をつくり、西芳寺等の庭園を改修したとされる。夢窓疎石については、宗教史や日本文学の分野で多くの研究の蓄積があり、また庭園史の分野でも前出の外山英策が詳細な研究をおこなっている。禅宗と庭園、山水画と庭園に関しては、前述したように庭園以外の分野を含めて広く検討されてきた。

以上のように、これまで多くの研究がある禅宗寺院の庭園であるが、夢窓疎石がつくったことが史料的に実証されている庭園はなく、また、禅宗と庭園、山水画と庭

園の関係について、宗教学や美術史学の観点をふまえて詳細に検討された例は決して多いとは言えない。

そのような状況を背景に、夢窓疎石や夢窓がつくったとされる庭園、禅宗と庭園、山水画と庭園といった事項について、異なる分野の専門家が、それぞれの専門的観点に基づきながらこれまでの「定説」にとらわれることなく自由な発想によって検証・検討する場を設けることを目的として研究会を企画した。

研究会の開催 2012年10月13日に「禅宗寺院と庭園」をテーマに『庭園の歴史に関する研究会』を開催した。研究会には庭園史学・造園学の研究者のほか、日本文学、美術史学、建築史学の専門家が参加し、さまざまな角度から禅宗寺院の庭園について検討した。前半は各分野の研究者が研究発表を、後半はそれらの発表をふまえて討議をおこなった。

前半の研究発表では、5名の研究者がそれぞれの専門的見地から報告をおこなった。なお、以下に示したそれぞれの研究者の所属は2012年10月当時のものである。

まず、飛田範夫氏(庭園史:長岡造形大学)の研究発表「西芳寺洪隠山の石組の作庭者」では、西芳寺庭園の一部である洪隠山について、従来言われてきた夢窓疎石の作という説に疑問が投げかけられた。文献そのほかの資料や時代的な背景から、飛田氏は、洪隠山の部分は夢窓疎石の死後200年ほど経った16世紀中頃につくられたとの見解を示した。

続いて西山美香氏(日本文学:禅文化研究所)の発表「禅宗と庭園 夢窓疎石を中心に」では、京都に残る夢窓疎石作と言われている庭園について、史料を基に寺院の成立背景等から検討がなされた。また、主に西芳寺庭園について、北山殿(後の鹿苑寺)や東山殿(後の慈照寺)の造営に与えた影響や、夢窓疎石の思想と庭園に対する考え方についても話が及んだ。

その後の島尾新氏(美術史学:学習院大学)の発表「庭園と山水画―仮山のイメージ」では、室町時代の山水画と庭園について、「仮山」という語をキーワードに禅宗と山水画・庭園の関係が考察された。島尾氏は、山水画は隠逸の地を主題とするものが、また庭園は神仙世界を主題とするものが多く、山水画も庭園も「禅の精神」を表象するものではないと指摘した。そして、「日本の禅」は当時の中国文化を広く取り入れたものの総体であり、

禅宗寺院の庭園にもその性格が表れていて、造営の目的も求道にあるわけではなかったとの見解を示した。

続く小野健吉（庭園史学：奈良文化財研究所）の発表「禅宗伽藍がもたらした「背面庭」」では、建物との位置関係に基づく、「前庭」型と「背面庭」型という分類が提示され、「背面庭」の成立過程とその後の展開が考察された。そして、「背面庭」は中国の禅宗寺院の伽藍配置を参考にしながら、日本の風土の中でそれまでの日本の寺院の伽藍配置の影響も受けつつ成立し、そのほかの禅宗寺院にも広まったという見解が示された。

最後の発表である鈴木智大（建築史学：奈良文化財研究所）の「中世日本と南宋の禅宗寺院建築および庭園」では、南宋の禅宗寺院と鎌倉から室町時代にかけての日本の禅宗寺院について、立地・建築・庭園等の観点から比較がおこなわれた。具体的には、南宋の禅宗寺院については『大宋諸山図』（東福寺所蔵）収録の伽藍図から、中世日本の禅宗寺院については絵図や指図から、それぞれ3つずつ合計6つの寺院の建築と庭園のあり方が検討された。

各分野の研究者の発表の後は、総合討議をおこなった。討議は、「日本と南宋の禅宗伽藍および庭園」「夢窓疎石」「山水画と庭園・假山」の3つの話題を柱に進められた。

まず、「日本と南宋の禅宗伽藍および庭園」が議論された。ここでは島尾新氏から、日本で言われている「禅宗寺院の庭園」とはそもそもどういうものなのか、禅宗寺院の庭園には「禅的な要素」と「文人的な要素」が入り交じっており、「禅の庭」という表現がはたして成り立つのかという疑問が提示された。また、鈴木智大からは、『大宋諸山図』の流布の経緯が説明され、応仁・文明の乱後、江戸時代初頭に復古的な伽藍が造られる際に参考にされたとの指摘があった。溝口正人氏（建築史学：名古屋市立大学）からは禅宗寺院境内の空間構成、寺院を建立する際の方位と地形について発言があり、それに続いて西山美香氏は、日本に禅が入ってきた経緯および中国の禅宗寺院の伽藍の成り立ちについて言及し、伽藍だけでなく寺院が立地している山全体をその機能も含めて広く考える必要があるとの見解を示した。

続いて「夢窓疎石」についての議論があり、西山氏から、夢窓疎石は景色のよいところに庵をつくっているがそれは修行のためであり、また政治との関係については、為政者の要請によるもので中国の五山禅僧と同じパ



図57 研究会の様子

ターンであるとの指摘があった。

最後に「山水画と庭園・假山」が取り上げられた。まず、盆假山と山水画が話題に上り、それに対して杉尾伸太郎氏（庭園史学：プレック研究所）が龍安寺の石庭と盆石の関連について言及した。島尾新氏は、中国の禅は寺院のシステム自体は他の宗派とあまり変わらず、そこに文人文化が合わさって取り入れられたのが日本の禅宗であるとの見解を示した。続いて西山美香氏は、中国の杭州の禅宗寺院と日本の禅宗寺院の共通性を指摘し、溝口正人氏は、イメージを現場でそのまま表現できる庭園と、工学的な技術がないと成り立たない建築との違いについて言及し、議論はその後伝雪舟庭へと広がった。最後に飛田範夫氏が、庭園史において平安時代と鎌倉時代を結ぶものに「眺望」の観点があり、それは禅宗の「境致」の考えにつながる部分があるという見解を示した。

まとめ 今回の研究会で、禅宗寺院の庭園が必ずしも禅的な意味を表しているわけではないことが示唆された。しかしそれとともに、禅宗の「境致」という考え方はそれまでの庭園とつながる部分を持っていること、その上で庭園に新たな見方を付与したと考えられること、そしてそこに禅宗が庭園に与えた影響を見て取ることができることも示された。

（青木達司／文化庁）

参考文献

- 小野健吉『岩波日本庭園辞典』岩波書店、2004。
- 重森三玲「日本庭園史（四）室町時代の庭（承前）」『日本庭園史大系 第6巻 室町の庭（二）』社会思想社、1974。
- 鈴木大拙（北川桃雄訳）『禅と日本文化』岩波新書、1940。
- 龍居松之助『日本庭園史概要』『庭園藝術』成美堂書店、1936。
- 外山英策『室町時代庭園史』岩波書店、1934。
- 平澤毅『文化的資産としての名勝地』奈良文化財研究所、2010。